

子育て世帯における性交渉の頻度と幸福度・関係満足度の関連

石橋 挙（社会データ構造化センター）

1. 問題

性交渉は、良好な夫婦関係を維持するために重要である（Yamamura 2014; Elliott and Umberson 2008）。しかしながら、子育て期、とくに子どもが生まれてから間もない世帯における性交渉の役割はほとんどわかっていない（例外は、Lorenz et al. 2020）。乳幼児の子育て期は、夜間授乳や睡眠不足、職場復帰、職場での役割変化などが重なり、夫婦双方の身体的・心理的負荷が大きい。乳幼児の子育て期には、性交渉の頻度は低下する（Jawed-Wessel and Sevik, 2017）ことが知られているが、関係の維持のためには、こうした時期の性交渉も重要かもしれない。特に、日本では、結婚後 5-9 年経つと平均出生子ども数が 1 を超えていること（国立社会保障・人口問題研究所 2021）、結婚後 10 年での累積離婚率が 2 割近くなること（Raymo et al. 2004）、子どもの誕生によって夫婦関係の質が低下すること（伊藤ほか 1998）ことがわかっている。つまり、子育ての時期には、夫婦の関係が悪化しやすく、関係解消に繋がる可能性もある。しかし、この時期における、関係を維持するために重要な性交渉に関する実証的な知見は管見の限りない。以上を踏まえ、本研究は、日本社会を対象とし、子どもが生まれたばかりの世帯における性交渉の頻度と夫婦の関係満足度・幸福度の関連を明らかにする。

2. データと方法

使用するのは「子育て世帯にやさしい社会づくりに向けた全国調査」から得られたデータである。この調査は、2023 年に生まれた日本全国の子ども 3,200 人を住民基本台帳から無作為に抽出し、その親に回答を依頼し行われた。調査モードは、オンライン回答と質問紙調査を併用している。調査は 2025 年 2 月から 3 月にかけて行われた。この調査の有効回答数は 2,553 ケース（有効回収率は 53.2%）である（調査の詳細は第一報告を参照のこと）。なお、分析サンプルは、用いる変数の欠測を除いた、現在結婚している男性 935 ケース、女性 1,086 ケースである。

分析には、重回帰分析を用いる。従属変数である、幸福度と夫婦関係満足度は、0 から 10 の値を取り、値が高いほど幸せもしくは満足を感じる。さらに、夫婦関係を測る指標として、関係が安定しているか、強固であるかという変数も用いる（4 件法）。説明変数は、1 年間の性交渉の頻度であり、連続変数として用いた。統制変数には、第一子誕生ダミー、回答者の年齢、学歴、雇用形態、年収、回答者の家事参加割合、育児参加割合、配偶者の年齢、雇用形態、年収を用いた。また、性交渉の頻度が説明変数にどれほど重要なのかを明らかにするために、標準化回帰係数を算出し、回答者の家事参加割合、育児参加割合と性交渉の頻度の係数を比較する。

3. 結果

男女ともに、性交渉の頻度が多いほど、夫婦関係満足度や関連指標は高くなる。ただし、幸福度と関係の安定性については、男性のみ正の関連があり、女性においては関連がなかった。ただし、女性の幸福度と性交渉の頻度に関連がなかったのは、関連が線形ではないからかもしれない。また、標準回帰係数による比較から、大掴みにとらえると、性交渉の頻度の影響力は、家事参加の 9 割程度、育児参加の 5 割強であることが明らかとなった。日本では、子育て期の夫婦においても、関係維持のためには、性交渉もある程度重要であるといえる。ただし、出産後間もない時期に性交渉をするかには、子育てなどの時間だけでなく母体の健康状態も重要である。そのため、性交渉をすることが難しいから、していないということもあり得る。本研究では、性交渉の頻度に着目したものの、必ずしも性交渉というわけではなく、スキンシップなども幸福度や関係満足度には重要かもしれない。

本研究は JSPS 科研費 23K25587（代表：佐々木尚之）の助成を受けたものです。

キーワード：性交渉、幸福度、関係満足度